

いよいよきたが、いやいやまだまだ

上村和子

この春、私は六十六歳になる。「古い」などまだまだ先と信じて疑わなかったが、去年の秋から何かにつけて老いの影を感じ始めている。「いよいよきたか」の心境である。

字が思い出せない、名前が出てこない、記憶が飛ぶ、約束を忘れる、曜日を間違える、痴呆が始まったのだろうか？ 脳のMRIを撮りに行こうか？ そして、左目にも不安を覚え、診察を受けると「厳しい問題ではなく、これは老化の一つです」と片付けられる。ただ「老化」として受け入れるしかないのか。それが重なってくると、「まだまだ今からよ」と思い込もうとしている気持ちが萎えてくるのである。モヤモヤの始まりである。

明らかに感情の振れが失われ始めていると感じている頃、一つ、二つと、嘲笑うかのように追い打ちをかけてくる。普通なら、どうってこと無い出来事かもしれないが、自信を無くし始めている身には、脳天を殴られたような衝撃でずるずると澱みの中に引きずられて行くのだ。何とかしなければ、止めなければと、新聞のクロスワードパズルや漢字パズルなどで脳トレに励み、映画を見たり、街ぶら等して新しい年を迎えようとしていた。

人生の起承転結は間違いなく順を追ってやってくる。明治・大正・昭和辺りまでは、「四〇歳は不惑の年」と称し、最終章に向けて、立ち止まり思案する年齢だと言われて来たものだが、平成も四半世紀過ぎると、質素な食事で健全に生きてきた人達は百歳近くまで長生きし、六〇歳などヒヨコのようなものである。それなのに、定年退職という現実に明日を悩むのである。

男は定年と言う仕切りがあるから、それなりの老後を考えるのかもしれないが、家庭に居る女性には改めて考える仕切りが無いのだ。女の心の深い処にいつも燦ら

せている愚痴の一つ「男は、定年を迎えると、解放感を相棒に趣味に走る。金は降つてこないし、主婦にも定年が欲しいものだわよ」に火がつくのだ。団塊の男組は並べて家庭を妻任せで来た筈である。子育てに参加した夫はどれだけいただろう。家事を助けた夫はどれだけいただろう。我が家の亭主殿もその一人である。「身体が動く間は仕事せんとなあ」と殊勝な事を言っていたが、二度目の定年もやがて来る頃、「明日で仕事終りやから」と前日に、ハンドル握りながら助手席の私に、何気に会話に挟んだのである。「やりたいことがある」だと？ 絶句である。不安と戦っている我が身が情けなく、また一層モヤモヤが増すのである。

そこへ「頭から滑り込み事件」である。それは、師走に入った土曜日だった。時間に追われ急いでいたのは確かだが、休日の混み合う繁華街メインストリートを一本ずらせて目的地に直行しようと歩いて居た時である。なんの障害物もない、ただ平坦な道で左足から躓いてしまったのである。そのままこけていけばいいものを、へたにバランスを取ろうと、手を振り回した途端にカーブを描いて飛んでしまったのである。三秒もかかっている空中で様々な事を考えた。

「ヤバイ！ 顔から突っ込む」私は思わず顎を上げ両手を胸の脇で支え、上半身を引き上げてはみたが、思い切り顎からスライディングである。身体を支えた両腕、両肩は瞬間硬直したのだろう、スクツとは立てなかった。一つ一つ確認をする。両の首首は？ 大丈夫。膝は？ 大丈夫。澄まして立ち去ろうとしたが、顎からポトポトと落ちる血が止まらない。顔を出した店主にハンカチを湿らせてもらい照れ隠しに「家の者に馬鹿にされるなあ」とぼやいた。店主は間髪入れず「大丈夫大丈夫！、向かいの婆さんはそこで転んで両手首複雑骨折でバラバラや。まだ若い若い！」と慰めてくれる。落ち込んでいた気持ちがおほんの少々晴れた。

血を滲ませた紙マスクで帰宅する私を鼻で笑い馬鹿にするかと思ったが、娘は不安げに「お母さん、大丈夫？」と声を掛けてくる。笑い飛ばされるよりグサツと来た。確かに、今までの私にはあり得ない鈍さを感じていた。反射神経も反応筋力も今までは違う。私は、歩くことには自信を持ち、二駅三駅は普通に歩く。それでも足は慣れでしか動いていなかったのかもしれない。これからは一步を踏みしめる大事さを鍛えようと、今まで以上に階段を使うよう心掛け、心も晴れ始めた気になっていた時に第二波が来る。

「年賀状事件」の勃発である。年賀状書きも、ここ二、三年、面倒臭くなっていた。スパッと止める勇氣も無く、十二月半ばから、少しずつ書いては投函していた。クリスマス頃、娘が「お母さん、本当に大丈夫？」と不安げに郵便物の中からゴムで結わえられた年賀状を目の前に置いた。私手作りデザインの年賀状が六枚程括られて大きめの付箋が付いていた。一瞬は、脱字ミス位に思っていたが、表を返して血の気が引いた。六枚全て真っ白け、何一つペンの跡が無い。え？　どういう事？

理解できなかった。郵便局からの付箋には（住所氏名が書かれていませんので、お返しします。改めてご記入の上投函してください）とある。絶句である。言葉が無い。娘が「大丈夫？　有り得ないよ」と繰り返す。返す言葉も無い。印刷コメント以外に必ずその人宛の一筆は添えるので、誰に出したのかは分かっていた、其の時の事を思い出しながら、「有り得ない」と自分のなかでも繰り返していた。何故なら、ダブらないように、そして向こうから年賀状を頂いた時の為に、住所録にチェックするのが私の常であるからである。亭主殿は「どうってことない」と軽く笑って流したが、子供や孫は不安そうに見ていた。私が娘なら、危険年齢に突入した親の変化には敏感になる筈である。いや、それ以上に、私自身へのボディブローが効いていた。

なんとかこんな日々を脱出しなければ……と悶々としていたある日、久しぶりにダンス時代の戦友と出会った。何が起きてもいつも逞しく生きてきた彼女から何か得る物が有りそうに思ったのかもしれない、強引にお茶に誘い、思い出話や近況話に興じた。苦労を笑い飛ばす彼女に「相変わらず元気やなあ」と羨ましげに言うと、彼女は私の胸の内を読んだのだろう、おもむろに財布から写真を出してきて「どうよ！」と目の前に突き出した。一瞬、理解できなかったが、かつて無い馬鹿笑いをし、えずいてしまった。腹抱え、息も追いつかず、涙流して笑った。そこには、肩を出したドレスを身にまとい人生を謳歌して微笑んでいるよな、四十女に見える同い年が映っていた。私同様、女らしさなど捨てちまった機能優先スタイルの彼女の超変身写真である。サヨナラするまで思い出しては笑い続けた。「これはいけるかも」サプライズ好きの本性に火が付いた。シミや皺にレンズから逃げていたが、かまうもんか！　化けてやる！　家族に友人に大笑いさせてやる！

理性が引き止める前にと、翌日写真館に飛び込んだ。多くのスタッフがいて、鏡前には変身中の若いも若きも胸を張って化け初めていた。担当スタッフがこちらの希望を聞いてくる。ショートヘアの私に「髪は盛りましょうか?」「いやいや、シツクに」「ネックレスなど豪華にいきましょうか?」「ティアラは?」「落ち着かないからシンプルで」「纏うジョーゼットはピンクで派手にいきます?」「駄目〜(笑) 淡いパープル二色でもいい?」「ああ、いいですねえ」とんぱ拍子に事が運んで行く。髪は上手く逆立てボリウム付け、ファンデーション、付けまつげ、アイラインと仕上げて行く中、なんだか求めていた高揚感がないなあ……物足らないなあ……何でだ?……と思っていたが、そう言えば、二〇年近く毎年ステージに立ってコテコテのステージ化粧をしていた私には大した変身では無かった訳だ。しかし、ただのジョーゼット布二色をまるでドレスのように見せる手際の良さには感動し、見入っていた。本当は、ドレスで踊るチャンスを貰えなかった私は、ちよっぴり心躍っていた。そして、作り笑いが苦手の私もカメラマンに寄せられてにこやかにポーズングしているではないか、魔法に掛けられたような時間だった。面白い商売だ。

一週間後仕上がった写真の一枚を縮小コピーにし、リビングの写真立てに家族写真と一緒に紛れ込ませた。深夜寝静まったリビングで、さあ、いつ、誰が変身した私を見つけるだろうか、と一人ニヤニヤとセッティングしている図は妙に楽しかった。

家族は毎日傍を通るくせに誰一人気付かないまま二か月過ぎた。いつそのこと出来上がりサイズそのまままで立てかけてやろうかとも。待ちくたびれた私は、家族が揃った日に、ワザとらしく娘を写真の前に誘導した。反応無しかよ……と諦めた時、二度見して奇声を上げる娘の声で我が家は大騒ぎになった。「何これ? お母さん? うっそー!」群がり狂喜乱舞である。私は仕上げの大笑いをした。大満足だった。激んでいた血流は身体の間々まで流れる気がした。もう大丈夫、人は意外に他愛無い事で生き返るものらしい。